

<研究紹介>

古代インドの王権とパイッパラダ・サンヒター

土山 泰弘

埼玉工業大学・人間社会学部

1. はじめに

紀元前 1500 年頃に、自らをアーリア (ārya) と称する民族がいまのアフガニスタンからインド亜大陸北西部 (パンジャーブ) に入ってきた。かれらは部族を単位として遊牧を主とする生活を営み、生活を支える牛などの家畜のための牧草地をもとめて、限られた期間の定住をくり返しながら移動した。アーリア人の進出はその後も断続的に続いたから、先行する諸部族はあとからくる新参者に押されるようにして北インドの平原を東南へ向かった。やがてかれらはガンジス河中流域を中心とするインド北東部に到達して農耕を中心とする定住生活に入り、前 450 年頃には都市を形成することになる。本研究のテーマは紀元前 1000 年頃、アーリア人がいまのハリヤナからウッタル・プラデシュ西部地域にかけて形成した大規模な部族連合の王権の問題であり、扱う文献は当時編纂された『アタルヴァ・ヴェーダ・パイッパラダ・サンヒター』(以下『パイッパラダ・サンヒター』) である。

2. 古代インドの王権

(1) 王の表象

古代インドの重要な思考方法のひとつとして、事物を対応関係 (homology) の相のもとに眺めるということがある。天上と地上にそれぞれ存在する事物は、相互に対応し密接な連関をたもっており、この連関を表現する (つまり力を与えて活性化する) のが詩人たちの仕事であった。たとえば天上の太陽は地上の祭火である。祭火を鑽りだすことは天に太陽が昇ることである。同じように、地上の人間の王は天上の神界の王に対応する。したがって神界の王をめぐって表現される内容は、そのまま地上の人間の王の事柄としても妥当することを理想とした。

前 1200 年頃に編纂された賛歌集『リグ・ヴェーダ』に登場する神界の王は、主としてインドラとヴァルナである。インドラとヴァルナが人間の王の原像であることは、当時即位にあたって王が — 読みに問題のあるところではあるが — 「われはインドラにしてヴァルナなり」(『リグ・ヴェーダ』4.42.3) と述べるところに端的にあらわれる。インドラとヴァルナの両神格の権能が、人間の王に期待されるのである。インドラに帰せられる功業は、敵対する竜 (蛇) を打倒したことと、太陽をはじめとする財を人間生活のために解放したことである。またヴァルナは生命の源である「水 (原水)」を司る神として、天上と地上のあいだの「水」

の往還・循環を保証する。すなわち、王に期待される力能は、部族共同体を脅かす敵対勢力を排除し、争奪によって他部族および土着の民の生活財を獲得するというインドラ的力能と、部族共同体内部の「食物」、つまり天地を循環する生命力を制御して豊饒を維持するというヴァルナの力能である。王権論一般からいえば、王の主要な役割は外敵からの防御と財の獲得、ならびに秩序の維持と繁栄の保証であるが、インドラとヴァルナに表象される内容は、その古代インド的な表現である。

(2) 王の力能と即位式

古代インドの思考方法の特質として対応関係の観点から事物を扱うことを上に述べたが、異なる世界の間に対応関係を見出すとは、それら事物の間であって相互に影響を及ぼしあう力を見出すことでもある。はじめにあるのは事物ではなく力であり、事物を力の作用の現れとして理解する。力の作用が関心の中心にあるから、いわゆる実体または個物そのものは二次的な価値を持つに過ぎない。たとえば太陽が価値をもつのは、太陽のもつ生命を育む力能のゆえであって、太陽そのものを観察の対象としない。また水に言及するときは、生命力を孕んだ水つまり原水を意味し、水一般ではない。このように事物を観察してそれをあらしめる力能を見出し、祭祀儀礼を通じてその力能を操作するのが祭官の役割である。したがって祭官が執行する祭祀呪法は、神々を促し、宇宙の運行と人間の生活に直接効果を及ぼすと考えられた。その意味で祭祀の場は、マクロコズムに影響を与えるメソコズムであるという言い方もなされる。前 1000 年頃に成立した文献『アタルヴァ・ヴェーダ』は、このような呪術的力能を主題とする讃歌・呪文集である。

『アタルヴァ・ヴェーダ』において、王に付与される種々の力能の中で代表的なものはヴァルチャス(várcas)である。ヴァルチャスは、太陽や火にあらわれる光り輝く力であるとともに、降雨などを通じて天上と地上を循環する生命力である。雨は生命力に満ちたものとして、「乳」とも「蜜」とも言われる。事物に内在する力能に注目して、同様の力能をもつ他の事物と同置するのである。このようなヴァルチャスは、たとえば幼児に与えられて長寿が保証される。また祭主に与えられて子孫繁栄が約束される。しかしとりわけ顕著なのはヴァルチャスと王との関わりである。ヴァルチャスを付与された王は、共同体の豊饒を約束することを意味すると同時に、共同体を脅かす敵対者を圧倒する威光、栄光をあらわす。その意味でヴァルチャスは、前項に述べたヴァルナとインドラの神格としての機能を、力能の方面から表現したものである。

このヴァルチャスを王に与えるのが即位式であり、とくに王の頭に聖水をそそぎかける灌頂行為である。灌頂行為を通じて水の有する(または儀礼的な操作によって水に付与された)ヴァルチャスが王に与えられる。ヴァルチャスは地上と天上を循環する生命力であったから、灌頂行為は宇宙的な意味を帯びた儀礼である。ただし灌頂行為によってのみ王になるのではない。即位式では灌頂行為の他に種々の儀礼がおこなわれ、それぞれ意味をもつ。王が即位式のどの段階で王になるのかという問いが提出されることがあるが、その問いの前提には要素主義的な発想がある。重要なのは個々の儀礼ではなく、灌頂儀礼を含む儀礼行為のシーケンス全体であり、規定に忠実にすべての儀礼を滞りなくし終えて、王としての権威が与えられる。

即位式には種々の形式が存在しており、それらを比較することによって共通におこなわれる儀礼行為を取

りだすことができる。それは、上にあげた灌頂の他に、王が馬車（戦車）に乗って行軍する儀礼と、王座にのぼる儀礼である。したがってこれらの儀礼を含む一連の祭式が、即位式を他の祭式から区別する特徴である。これらの諸行為は後代のヒンドゥー教における即位式においても、基本的に継承されていくことになる。ところで行軍儀礼では王が牛を獲得するという象徴的行為をおこなったり、敵対者に見立てた戦士を打倒するという行為をおこなう。この行為の意味するところは敵対勢力を圧倒して牛などの財を獲得するという戦闘略奪であるから、神格のレベルでいえばインドラに帰される行為である。また王が王座にのぼる行為は、ヴァルナが原水に座するという内容の讃歌を伴うから、秩序と豊饒を保証するヴァルナのイメージが前面に出ている。このように敵対勢力の排除と財の獲得、および共同体の豊饒の保証は、神格、力能、儀礼というさまざまな局面でくり返されるテーマとして、当時の王権観念の全体を構成する。

（3）王の選定

即位式をおこなうには、あらかじめ共同体の内部で王としての権力行使について合意形成がなされていることが必要である。そのような王の権力行使を保証する場として、「公会」(sa \square miti)があった。公会とは部族長たちの討論・合議の場で、平時には財の分配などについて取り決めがなされたが、戦時などの危急の場合に際して部族連合を統率する王を選定したものと考えられる。ここに紹介する『パイッパラダ・サンヒター』の第10巻第4賛歌（以下PS 10.4）は、この公会の場で部族長たちの和合を実現することを目的とした賛歌である。

この賛歌によれば、合議の場で決定されるのはラーシュトラ (rāṣṭra \square) の形成である。ラーシュトラは「王権」または「王国」と訳される語であるが、このとき何を指して「王権」または「王国」というのが問題である。後代ではラーシュトラの有力な意味として「領土」があるが、それは人々が農耕を中心とする定住生活に入って、領土が「王権」または「王国」の重要な要素を占めているという歴史的な事情がある。しかしいま問題にしている遊牧を主とした移動生活を中心とする時代では、土地に対する関心は乏しい。したがってラーシュトラにはこの時代の社会状況を反映した意味があると考えられる。

そこでこの文献におけるラーシュトラの意味を検討すると、第一にラーシュトラは王自身を指している。PS 10.4ではラーシュトラに対して諸方 (dís) が敬意を表し (PS 10.4.1c)、ラーシュトラのもとに貢ぎ物 (balí) をもち来る (PS 10.4.3c) とされる。同時代の他の文献をみると、諸方が敬意を表し、貢ぎ物を捧げる対象は王その人である。したがってラーシュトラが王を指示していると推測される。ラーシュトラのもつ第二の意味として、部族連合を指す場合がある。ラーシュトラを讃えて、「これなる王たち (部族長たち) は集まり来たりて (つまり合議をなして)、他の者ら (敵対する王たち) を討たんことを」(PS 10.4.2b)「汝ら (部族長たち) の王国は一つであれ」(PS 10.14.7a) と言うから、ラーシュトラはまた王 (部族長) たちの連合、つまり部族連合をも意味する。要するにラーシュトラは、王と王が統率する部族連合を指しており、これがこの時代における「王権」「王国」の内容である。

この諸部族の和合を儀礼的に執り行ったのが、プローヒタという祭官である。いま扱っている賛歌には

「神々はプローヒタとともにわれらの王国を拡大せよ」(PS 10.4.6d) という詩節がある。プローヒタとは宗教的な権威を有するバラモンの一類で、王権儀礼を執行するとともに、王の補佐役として政治や軍事の助言をおこなった。プローヒタはこの賛歌を用いて儀礼を執り行い、部族連合の形成とそこで合議された内容に権威を与えたのである。別の資料では一人のプローヒタが複数の王(部族長)の補佐を務めたというから、プローヒタが部族連合の仲介を果たし、和合の儀礼の執行を通じて政治に積極的に関わっていったと考えられる。このようにプローヒタ祭官は、王と王の選定主体である部族連合ともども当時の王権の主要な要素を構成した。

3. パイッパラダ・サンヒター

(1) 写本研究の現状と展望

この時代の王権研究は文献資料の正確な理解の上に組み立てられるもので、写本を校訂して信頼のおけるテキストを作成することは、すべてに優先される。ここに紹介したパイッパラダ・サンヒターは1873年にカシミールより発見された唯一の写本が知られていたが、シャーラダー文字で記されたその写本の解読には多くの困難がともなった。しかし1959年にオリッサから良好な写本群が発見されることによって研究の条件が整い、1997年には全体の半分の量のテキストが出版されている。また最近はその後の研究をふまえた新たな校訂テキストが出版されつつある。

これらの写本には、写本の書写において生じる誤写、地方語の発音の影響による変容、また過剰修正すなわち書写者の理解にもとづく原写本の「訂正」などがあって、そのままでは理解が難しい場合が多い。これらは原写本の復元という目的から見ると、大きなハンディであるが、しかし本文伝承史(Textsgeschichte)の観点から見ると、写本研究の可能性を拓くものとして貴重な資料となる。たとえば書き写しの際の誤りを蒐集してそこに誤写の傾向を見出し、どの書体の写本から書き写されたものかを推測することができる。また語形などの変容にあらわれた地方語の影響を明らかにすることによって、写本がどの地域に伝承されたかを推測することができる。このように写本が伝承されてきた時代や地域を再構成するのが写本伝承史という分野が扱う課題であり、当該写本はこの分野の研究に大きく貢献する。近年の研究によれば、カシミールとオリッサに伝承されたパイッパラダ・サンヒター写本は、もとは紀元後800-1000年のグジャラートに伝承されていた一つの写本にさかのぼることが判明している。写本が伝える内容(Ur-PS)は、冒頭に述べたように紀元前10世紀頃いまのハリアナからウツタルプラデシュ西部においてまとめられたと考えられるが、当面はこのグジャラートの地に伝承された写本の復元が課題となる。

(2) 写本校訂と本文伝承史

写本校訂と本文伝承史に関する文献学的な検討の一例を挙げる。以下に引用するのは Bhattacharya が公表したテキストである。

PS 10.4.10cd :

satyaṃ vadantaḥ samitiṃ caranto mitraṃ grhṇānā jaraso yantu sakhyam ।

この詩節の前半から後半にかけての部分は「彼ら（部族長たち）は真実を語り、公会で活動を行い、同盟を得て」と訳することができる。王たちが真実を語るというのは、世界のあるべき秩序を実現することを意味するから、形成される部族の同盟は秩序にかなった正当性を有するというのである。

問題は、詩節の終末部分の jaraso yantu sakhyam をどのように読むかである。このうち yantu sakhyam は「(王たちは) 友好にいたるべし」とそのまま読んで理解できるが、jaraso (「老人の」) とは何か、このままでは理解が難しい。Bhattacharya がテキストとして採用した jaraso という読みはオリッサ写本すべてに共通であるが、カシミール写本は jaraso に代えて janaso (「人民の、部族の」) という読みを伝えている。この詩節が唱えられる場合は、王(部族長)たちが公会の場であるべき秩序を実現するべく協議し、互いに同盟を結び王を選定して部族連合を形成する場であることを考慮すると、オリッサ写本の伝える jaraso という読みではなく、カシミール写本が伝える janaso という読みを採用して、「諸部族の友好にいたるべし」とするのが矛盾なく理解できる。したがって両写本の起源をなす原写本の校訂テキストとしては、janaso とするべきである。ただし、janaso という読みが正しく、jaraso という読みが間違っている、と結論するのは一面から見た判断である。jaraso という読みがオリッサ写本すべてにおいて共有されているから、この伝承の内部では jaraso という読みが authentic な、つまり権威ある読みとして承認されてきたという事実は尊重しなければならない。

つぎに本文伝承史の観点から見ると、オリッサ写本において janaso を jaraso と読むに至った原因は、オリッサ写本の伝承内部で生じたことではなく、プロト・ベンガリー文字(東部デーヴァナーガリー文字)で記された写本からオリヤー文字に書き換えたときに生じた誤り(Umsetzungsfehler)であると考えられる。オリヤー文字は、図1にみるように、na と ra の書体は異なり、オリッサ写本を書写していく過程では誤写の可能性は少ない。しかしオリヤー文字の起源をなすプロト・ベンガリー文字では、図2にみるように、na の字体の特徴である閉じた環と、ra の字体の特徴をなす三角形が類似し、na を ra と誤読して書き換えた可能性がある。n → r の誤写は他にも報告されており、同様の誤読による誤写が生じたと考えられる。図3はグプタ文字以来の両字体の変容を示したものである。なおプロト・ベンガリー文字写本の伝承過程での誤写という可能性も考えられるが、カシミール・オリッサ両写本は共通のひとつの原写本に由来していることが明らかになっているから、原写本からオリヤー文字に書き換えた際に生じた誤りとみることが合理的である。

4. 結語

古代インドの文献は、古代諸文明の中でも膨大な量の、しかも体系づけられた資料をわれわれに伝えている。そのなかには、驚異的な正確さをもって伝えられてきたものも少なくない。それゆえ古代インド文献の研究がインド文化にとどまらず、ひろく古代文化一般の研究に価値ある資料を提供するとは、研究者たちの繰り返し述べるところである。しかし古代インドの思考は現代の思考形式とは異なった点が多く、われわれの安易な理解を許さない。かれらにはかれらなりの論理があり、学問があった。進化論的な発想からみれば、

古代インドの事柄は過去の遺物として片づけられるかもしれないが、そのような見方が近代人の偏見であることはもはや常識である。むしろ現代の文化や学問を相対化し批評する視点を提供することは、古代研究のもつメリットの一つである。

本研究が扱う時代は、文字資料としてはヴェーダ文献が唯一の資料であり、ヴェーダ文献の理解にもとづいて、古代インドの諸事情が明らかになる。そのためには信頼できるテキストの校訂が優先されなければならないことはすでに述べた。ここに扱ったパイッパラダ・サンヒターはリグ・ヴェーダに次いでインドで二番目に古い文献であるにもかかわらず、まだその全貌すら明らかになっておらず、古代インドの重要な研究分野のひとつである。ここではその一端を紹介した。

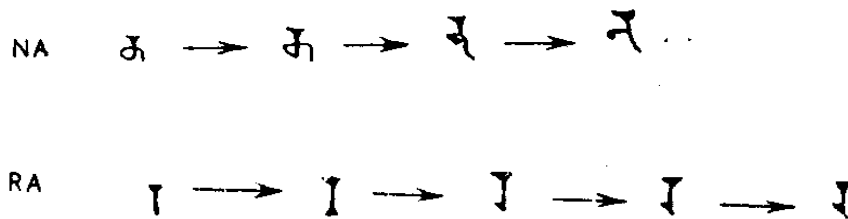


図3 (Dani, A. H., Indian Palaeography, 1963, Oxford, p.114, 116.)

参考文献

- Bhattacharya, D.: The Paippalāda-Saṃhitā. Calcutta 1997.
- Rau, W.: Staat und Gesellschaft im alten Indien nach den Brāhmaṇa-Texten dargestellt. Wiesbaden 1957.
- Schlerath, B.: Das Koṅigtum im Rig- und Atharvaveda. Wiesbaden 1960.
- Smith, B. K.: Reflections on resemblance, ritual, and religion. New York – Oxford 1989.
- Tsuchiyama, Y.: Der König im Rājasūya. In: Indian Thought and Buddhist Culture. Tokyo 1996 p. (1) – (15).
- : Abhiṣeka in the Vedic and post-Vedic rituals. In: From Material to Deity. Delhi 2005 p. 51 – 93.
- : On the meaning of the word rāṣṭraṅ. In: The Atharvaveda and its Paippalādaśākhā. Aachen 2007 p. 71 – 80.
- Witzel, M.: Ṛgvedic history: poets, chieftains, and polities. In: The Indo-Aryan of Ancient South India. Berlin 1995 p. 307 – 352.
- : The Development of the Vedic Canon and its Schools: The Social and Political Milieu, In: Inside the Texts, Beyond the Texts. Cambridge, Mass. 1997 p. 257 – 345.
- Zimmer, H.: Altindisches Leben, Berlin, 1879.